

この夏、アメリカの観光地は、日本人であふれています。東部ボストンからアメリカ・ウオッチングの旅に出た私は、ニューヨーク、ワシントンはもちろん、ナイアガラでもフロリダでも、いたるところで日本人の集団にでくわしました。この分では、西部のサンフランシスコやロスアンジェルス、それにハワイやグアムは、日本人の波がうずまいていることでしょう。昨年アメリカの観光統計では、渡米人数ではカナダに首位をゆずったものの、合衆国に落としたドルの金額では、日本がダントツのトップでした。今年は、円高便乗で夏だけで140万人が海外とか。8月末のワシントン・ダレス空港では、毛皮・バーボンから牛肉まで、ギフトショップにむらがりみやげをかいあさる日本人の大群にあって圧倒されました。庶民のレベルでこの調子ですから、ビジネス・金融の世界ともなると、まるで日本資本主義がアメリカを占領したような錯覚にとらわれます。企業買収・ビル買占めから株式・債券市場まで、当地の新聞のビジネス欄では、ジャパン・プロブレム、日米経済戦争の話題を見出さない日が珍しいほどです。

しかし、日本資本の対米進出と在米日本人・観光客の増大は、民衆レベルでの新たな問題をも浮きぼりにします。石油危機以降の自動車から半導体にいたる日本商品の進出過程は、同時に、アメリカ社会へのアジア系民衆の流入過程と平行していました。1960年には0.5%90万人にすぎなかったアジア系住民が、いまや2%500万人以上となり、もともと人種のルーツであるアメリカ社会のなかで、最近もっとも急速に増大したエスニシティとされています。中国・朝鮮・東南アジア系住民は、ベトナム・カンボジア難民を含め、大都市を中心に急速にコミュニティに浸透してきています。彼らは、実によく働き、また勉強します。『タイム』誌8月31日号の特集は、総人口比2%のアジア系が、この秋のハーバード大学新入生の14%、カリフォルニア大学パークレイ校の25%に達したと報じ、この動きを百年前の東欧系ユダヤ人流入と対比しています。最近、ボストンやニューヨークでよく聞くのは、勤勉でサービスのよいアジア系の台頭で、黒人・スペイン系などの下層労働者が職を奪われ、マイノリティの中での反目が強まっている、というものです。大都市近郊では、マイノリティ流入による治安悪化を防ぐため、土地所有や家賃のミニマムを条例で定めて貧乏人を入れないようにする白人コミュニティも現れます。私の住むケンブリッジ市の近くのコンコルドという町は、独立戦争の史跡をもち、エマーソンやホーソンを育てた田園文化の地で、リベラルな白人中産階級の多く住むところですが、アメリカ民主主義の伝統としてよくひきあいにだされる住民直接参加のタウン・ミーティングによって、2エーカー以下の土地分割を禁止し、貧民流入に歯止めをかけています。反核運動や原発反対に熱心な人でも、こうした自衛手段はやむをえないといいます。人種のピラミッドと階級的・階層的利害が錯綜し、競争と新陳代謝が激しいこの国では、コミュニティ形成は、絶えずチェック・リチェックの必要な永続的プロセスです。アジア系新住民は、大都市のチャイナ・タウンがそうであるようにスラムに隣接した下層アパート地帯にひとまず居を定め、勤勉と高学歴によりこの新天地に定着し上昇しようとしています。

こうした社会ですから、アジア人の顔をした私でも、Tシャツ・ジーンズ・ナップサック姿で街を歩けば、よく白人に道を尋ねられます。白人・黒人の知人にいわせると、顔をみただけでは日本人・中国人・朝鮮人の区別は困難だといいます。ちょうど、私たちがアングロサクソン系・ドイツ系・イタリア系・北欧系白人の区別がただちにはできず、南部出身黒人苦学生とアフリカ新興国エリート留学生の深刻な反目に気がつかないように。しかし、全身をみれば、アジア人のなかで日本人だけはなんとなく異質だともいいます。ダークスーツにネクタイ・アタッシュケースのビジネスマンはもちろんのこと、メガネに肩掛けカバン・高級カメラの観光客も、他のアジア系とはどことなく違った印象を与えるようです。金払いのよさと立派な衣服・持物から、悪質業者や強盗にねらわれるのも日本人の特徴です。第一、ニューヨークに典型的なように、在米日本人は、白人ミドルクラスなみに郊外の田園邸宅地帯にコミュニティを作り他のアジア系と自らを区別し先進国人として振舞おうとします。戦前・戦時中に苦難の生活を体験してようやく土着した日系アメリカ市民とも異なって、いつかは必ず「豊かな」日本に帰れるという通過点意識をもっていますから、コミュニティでのアメリカ人との交際もおざなりで、時々こちらの新聞がやゆるように、日本食料品店・スシバーからカラオケ・日本語テレビ・ホカホカ弁当にいたる日本の生活様式をそっくりそのまま移植した生活を、日本では絶対に住めない広い庭つき邸宅を拠点に楽しんでいるかに見えます。他のアジア人たちのアメリカ社会参入・市民権獲得のための生命がけの真剣な努力に比べれば、日本人学校父兄のなかでしばしば耳にする議論、日本の良い高校・大学に子弟をいれるために受験教育を強化すべきか、当地滞在中だけでもアメリカ式の自由でのびのびした教育を与えるべきかという論争も、ぜいたくなコップの中の嵐にすぎません。白人エスタブリッシュメントからは、黄色い肌をしたリッチで手強い競争相手、最近のUS News and World Reportの表現では「無敵のビヒモス、大国日本、世界への供給者・銀行」の一員とけむたがられ、同じアジア人からは、既に別世界に離陸した祖国の搾取・侵略者とねたまれる在米日本人は、今日の日本社会の国際的位置を象徴し、鳥からも獣からも嫌われたコウモリのようなのです。そういえば、先日五木ひろしニューヨーク公演を、日本のシナトラとよばれる歌手が、着かざった中年金持婦人たちを、ジェット機チャーター・ホテル貸切・豪華ミンクコート買物つきで大挙連れて

きて、法外な使用料を払ってマンハッタンのホールを借上げ、全部日本語で日本人聴衆だけを相手にわけのわからぬエンカなるものを歌ってさっとひきあげた、と皮肉った記事がありました。

東京の地価は、私が日本を離れた昨年からまた暴騰したようです。庶民が都心に住むのはますます困難になっているようです。高層オフィスビルと億ションのマンハッタンの超国籍地帯が出現しつつあるのでしょう。しかし、東京のマンハッタン化は、スラム無しで進行しうるのでしょうか？ ホモジニアスなエリート日本人と白人ビジネスマンだけが住むヤッピーの町が生まれるのでしょうか？ 世界都市化は、コミュニティの拡散・凝集を劇的に進めます。欧米からばかりでなく、近隣アジアからも、仕事と富と自由を求めて多くの民衆が流入し、激しい競争・摩擦・対立のはてにスラム化とゴーストタウン化、階層分化と棲みわけがおこるのは、不可避と思われまふ。しかも、東京の国際化・世界都市化はすでに進行しつつある事実です。港区や品川区ではその徴候が現れているようですが、モノとカネの国際化が、ヒトだけを鎖国したまま進むとは考えられません。この春の所報でもTOKIOの南北問題を報じていましたが、いま東京人=在京日系人がかかえている問題は、単なる伝統的コミュニティの崩壊、都心昼間人口減少と郊外スプロールの問題ではなく、ロンドンやニューヨークが歴史的に経験してきた、無国籍都市化・超民族都市化の試練、その中での多人種・多文化的コミュニティの再編・創造を、はるかに急速に、はるかに深刻な国際環境のもとで、否応なくつきつけられているところにあるのではないのでしょうか？ 確かな国内情報もないままこちらに住み、やたら日本資本の世界化・巨大化を報じる英語ニュースばかりが飛込んでくる門外漢の私には、そう感じられます。とするならば、都心を追出されタウン・ミーティングの伝統を守りつつ自己の社会的経済的特権を保守しようとする郊外白人コミュニティからも、白人中心社会から差別されマイノリティ同士で互いに競争しいがみあいながらスラムからの脱出に必死で努力するアジア系新移民の生き方からも、他人ごとでないなものかを学べるような気がします。残念ながらというかやっばりというべきか、日本政府や東京都の対応は、在ニューヨーク日本人コミュニティのそれに似て、閉鎖社会の惰性をひきずった、天上天下唯我独尊的無策が続いているようですが。

(研究所理事、一橋大学助教授、現在ハーバード大学客員研究員としてケンブリジ在住)

TETSURO KATO
18 Kimball Street, #3,
Cambridge, MA 02140,
U. S. A.
phone: 617-868-2756

「アメリカかぶりの手紙 1」

● シヤパメリカをメキシコから考える (一九八八年二月)

帰国を三月に控えあわただしくなってきたところで、今度は、ニクス早発国でありながらアジア・ニクスに水をあけられた、メキシコ＝メヒコに行ってきました。帰国時に大きな荷物を抱えての旅より、今のうちに酷暑のボストンを脱出してと思い立ち、いまやドル＝百円に近づいた弱いドルに対してさえ大幅に減価しているペソの国なら、安上がりな豪華にいける、と計算したのは事実です。しかしそれ以上に、ヨーロッパ／日本／アメリカとまわってきたこの三年近いコスモポリタンの生活体験を、従属的發展と被抑圧者の国にいつてふりかえてみたいという思いと、かの世界革命論者トロツキーが暗殺された地を見て、大学卒業直後の東ドイツでの生活体験に発したここ十余年の私なりのスターリニズム批判と民主主義的社會主義探求の歩みを再確認してみたいという誘惑が、革命という禍がまだ日常語として生きている国へと、かりたてました。ですから、アメリカ人／日本人観光客であふれる避寒地カンクーンやアカプルコではなく、人口一八〇〇万人を突破し地震の後遺症に悩むメキシコ・シテアの、それも革命広場前のコロニアルスタイルのホテルに居を定め、『地球の歩き方』を片手に、もっぱら地下鉄／バス／乗合タクシーと足を使って、真木悠介が『氣流の鳴る音』を聞いたあたりを、動きまわってきました。

ヨーロッパ／アメリカ／カナダの旅と決定的に違ったのは、この一週間の旅で、日本人と一度も出会わなかったことです。いや、正確に言えば、カルロス・ハルギ・セノ君という日本人の顔をした青年と、テオテワカンの太陽のピラミッドの頂上で出会い、彼の友人ルイ・ジヨバンニ君を含めて二日ばかりスペイン語／英語チャンポンの観光を一緒にしたのですが、このカルロス君は日系三世のブラジル人でスペイン語しか話せず、少しばかり英語のわかる友人ルイ君の怪しげな通訳で、ようやくよく似た顔をした私と、祖父の国のことを話し合えたのです。また、民芸品マーケットでは「コレ、オクサンニイカガデス」などと日本語をあやつるインディアオにつきままとわれたりしましたから、ピラミッドでも国立人類学博物館でも日本人をみかけなかったのは、選んだ季節と時間帯がよかつただけの偶然でしょう。満員の地下鉄で、タコス・シヨツプで、人なつこく話しかけられハポネと答えると、ソニー／ホンダ……と日本製品を次々に挙げられるのは、欧米と同じですから、ここにも日本帝國主義が浸透していることは、まちがいありません。事実、英語のガイドブックにあるメキシコ・シテアの五つ星最高級ホテルは、チャプルテック公園内の一等地に建てられたホテル・ニコウ（日航）でした。もっとも、このニコウでも一泊九〇ドルですから、ドルを持つ者にはたまらない安さです。地下鉄料金はどこまで乗っても一回一〇〇ペソ＝二分の一ドル＝約六円、メキシコ国立自治大学構内で買ったヴイクトル・セルジウの選集は全三冊で四五〇〇ペソ＝三〇〇円でした。しかし、猛烈なインフレの進行で、庶民の生活は深刻です。ペソも、この二年間で、一ドル＝七五〇ペソから二二〇〇ペソと、三分の一に下落しています。

この国が多額の債務を抱え、破産寸前であることは、よく知られています。その債権がアメリカから出たもので、メキシコでのこげつきがバンカメ（バンク・オブ・アメリカ）の危機を招き、シヤパン・マネの支えでようやくアメリカ第二の銀行バンカメが倒産をまねがれたことは、一昨年カリフォルニアで聞かされた話でした。この国を下支えしているのは、いまやアメリカでさえなく、メキシコをもしのぐ債務国となったアメリカを金融的に支配しつつある世界最大の債権国、わが国籍国日本であることが、スラムやホームレ

スの人々を見るたびに想起され、気を重くします。より正確には、戦後期を通じて世界の富の約三分の一を独占しつづけてきたバイゲモニー「ジヤバメリカ」(日米ヘゲモニー同盟を表現する私の造語、ブレジンスキーの表現ではアメリポン)の力を、感じずにはいられません。日本のレフトが、日米関係にのみ目を奪われ、両者の相対的支配／従属関係を論じて一國革命の夢を破られ続けてきた過程でも、世界反革命の中核としての強固なジヤバメリカは、着々と世界を搾取／収奪しつづけて、テオテワカン／アステカ／マヤと巨大な文明を築いてきたこの国の民衆に、コンピュータ資本主義という全く異質な「文明」をおしつけてきたことが、感得できます。ただしそれは、ただか四〇年というこの国の長い歴史ではほんのつかのまにすぎず、スペインの征服でこの国が資本主義世界システムに組み込まれて以来の革命と反革命の繰返しの中でみても、やがては没落するにちがいない外国帝国主義支配の一エピソードとなるだろうことも、感じとれるのですが。

街には革命と名のつく広場、記念塔、通り、駅、本、レコードがあふれています。大統領府のある国立宮殿の壁画には、カルロス(カル)・マルクスの肖像と言葉も記されています。国立自治大学本館のシケイロスの手になる大壁画には、一八五七年憲法／一九一〇年革命に続くメキシコの第三革命が、一九XX年の共産主義として暗示されています。たまたま私の滞在中、野党指導者へのテロル事件があり、日本でいえば皇居前広場に於ける国立宮殿前ソカロでの大抗議集会に遭遇しました。参加者の多くは自治大学学生で、あふれるプラカード、ガリ版印刷らしいビラ、美しいスペイン語のアジ演説という、日本では久しく接することのなかった青年の熱気にも、ふれることができました。

こんな国ならば、コヨアカンの館、トロツキーの最後の地も、さぞや大切に保存されているだろうと推測し、地下鉄コヨアカン駅から番地だけを頼りに探しましたが、案に相違して、誰も知りません。コヨアカン自身が、戦後の急速な都市化で、いまや郊外保養地というより市内の中級住宅地になっています。方針を変えて、ガイドブックによればトロツキーの家の近くらしい、女流革命画家フリーダ・カーロの博物館を尋ねてみると、こちらの方は知る人皆知り、やがて案内板もみつかり、三〇分ほど歩いてたどりつきました。巨匠リベラの最後の夫人であったフリーダの絵は、シエルレリズムではあってもスターリンや毛沢東の肖像を含み分かりやすく、美術史と革命文献が同居した書齋もよく保存されています。このフリーダ博物館の管理人に聞いて、ようやく三プロツクほど離れたトロツキー暗殺現場にたどりつくことができました。とはいっても、ヴァエナ通り四五番地はみつけたものの、レオン・トロツキー博物館という名から想像される、それらしい建物はありません。高い塀におおわれた大きな邸宅のかたすみに、小さくトロツキーの名の入ったプレートがうめこまれているのみです。裏口とおぼしき小さな扉に貼り紙があり、すぐそばのプザーを押し、とスペイン語と英語で乱暴に書いてあります。何度かプザーをおすとしばらくして扉が開き、学生アルバイトらしい青年が、顔をだしました。ここがトロツキー博物館か、日本から来たのだ、と下手な英語でたずねると、私よりさらにひどい英語で、わかった、入れ、と内鍵を開けてくれました。内部は、うっそうとした庭に、トロツキーの記念碑、それに晩年の館があります。館の部屋は公開されていて、トロツキーの執務室／寝室／食堂を案内してくれました。青年にトロツキーゆかりの人物かと思つて尋ねると、この家の所有権はトロツキーの孫にあるがここには住んでおらず、自分は朝十時から二時、三時から五時半の管理を任されているだけだ、とのこと。トロツキー

暗殺の模様については手際よく説明してくれましたが、あまり政治的にはわかっていない様子で、何か資料が記念品はないかときくと、遺品はこの展示品以外すべてハーバード大学に保存されている、写真集も絵葉書もここにはない、おまえが今日は初めての訪問者だ、メキシコでのトロツキーのことはよくわからないが、たしかトロツキストの小さな政党があるはずだからたずねれば教えてくれるだろう、と要領をえませぬ。それでも、暗殺者の弾痕、警備員の部屋など写真をとらせてもらい、わずかに博物館らしさを示す記帳簿に署名し、この館を保存するための献金箱にドルを入れていこううちに、晩年のトロツキーの激重な警戒ぶり、それさえ突破したスターリニスト暗殺者の計画的／周到な犯行の非人間性を示すためにのみこの館が保存されていることに、思いつきました。つまりそれは、政治の非情と政治以前の非人間的犯罪の記録でしょう。この暗殺者の正統な後継者は、北朝鮮の「君主制社会主義」かも知れません。記帳簿を見ると、ほとんどはメキシコ市内の、それも学生らしい名ばかりが記されており、実際訪ねてくる人は少なく、外国人がくるのもまれとのこと。訪問者が私一人なのを幸いに、のんびり庭を手入れする青年の存在も忘れて、トロツキーの碑の前に座り込み、コミンテルンからペレストロイカにいたる歴史に、しばし思いをせました。もしトロツキーが生きていたならば、ゴルバチョフのペレストロイカをどう評価し、第一次大戦後の世界資本主義の中心に正當にもアメリカ合衆国を見出だしていた彼が、今日のジャパメリカによる世界支配にどのような世界革命を対置したのだろうか、と考えながら。

日本では「豊かさ」論議が盛んなようです。ボストンからの飛行機の中で『世界』臨時増刊「日本ゆたかさデータブック」を読みあげました。円高により国際統計では一人当り国民所得世界一、名目賃金もアメリカ並みという支配的論調に、住宅／福祉／社会資本／余暇などの「繁栄の中の貧困」を対置したもので、それはそれでその通りなのですが、ここメキシコで読むと、異和感を禁じえませぬ。二昔前の対米従属／自立論争、一昔前のGNP世界第二位に一人当り国民所得十何位や「新しい貧困」を対置した議論の延長上での視野狭窄を感じます。シテからテオテヤワカンのピラミッドに向かう一時間の観光バスの行程で、メキシコ人ガイドが、これこそは本当のメキシコです、と示した光景がありました。郊外の裸山の頂上まで、バラックの小屋が不揃いに建っています。多くは電気も水道もありません。洗濯物が軒先に干してあるのが、なつかしい風景です。職を求めてシテAにきた人々がすみついたスラムで、わが国には福祉はありませんというガイドの言葉が実感されます。子供の物ごい、路上に寝るホームレスもよくみかけます。地下鉄で私の肩掛けカバンが狙われ、鋭い刃物で十センチほどの穴が開けられました。幸いパスポートとドルは別を持っていて被害は最小限で済みました。こうした現実の前では、クルマはあるが住居は狭いとか、金は持っているが使うひまがないなどというぜいたくな悩みは、遠い遠い先進国の話で、無力に響きます。そして、この「遅れ」をバネとした日本型近代化への誘惑が、この国の支配層にも確実に浸透し、土着文明の破壊と無政府的都市化へとかりたてていることが、実感されます。イギリス型／アメリカ型／ソビエト型とは異なる世界大国への道を切開いた日本資本主義の過去／現在／未来を、曇りなき科学の目で分析することの必要性と重要性を再確認できたことが、この旅の最大の成果でした。そこから新たな世界変革への展望を見出だすには、あまりにも多くのなすべきことが残され、私たちはだかつてはいるのですが。

世界都市東京をアメリカから考える (一九二七年八月)

この夏、アメリカの観光地は、日本人であふれています。東部ボストンからアメリカ・ウエストチングの旅に出た私は、ニューヨーク、ワシントンはもちろん、ナイアガラでもフロリダでも、隣国カナダのトロントやモントリオールにおいてさえ、いたるところで日本人の集団にでくわしました。この分では、西部のサンフランシスコやロスアンゼルス、それにハワイやグアムは、日本人の波がうずまいていことでしょう。たしか新聞で見た昨年アメリカの観光統計では、渡米人数ではカナダに首位をゆずったものの、合衆国に落としたドルの金額では、日本がダントツのトップだったと記憶します。今年は、円高便乗で夏だけで一四〇万人が海外とか、八月末のワシントン・ダレス空港では、宝石・バーボンから牛肉まで、ギフトショップにむらがりみやげをかいあさる日本人の大群に会って、圧倒されました。庶民のレベルでこの調子ですから、ビジネス・金融の世界ともなると、まるで日本資本主義がアメリカを占領したような錯覚にとらわれます。企業買収・ビル買占めから株式・債券市場まで、当地の新聞のビジネス欄では、ジャパン・プロブレム、日米経済戦争の話題を見出ださない日が珍しいほどです。

しかし、日本資本の対米進出と在米日本人・観光客の増大は、民衆レベルでの新たな問題をも浮きぼりにします。石油危機以降の自動車から半導体にいたるメイド・イン・ジャパンとジャパン・マネーの浸透過程は、同時に、アメリカ社会へのアジア系民衆の大量流入と平行していました。一九六〇年には〇・五%九〇万人にすぎなかったアジア系住民が、いまや二%五〇〇万人以上となり、もともと人種のルツボであるアメリカ社会のなかで、最近もっとも急速に増大したエスニシティとされています。中国・朝鮮・東南アジア系住民は、ベトナム・カンボジア難民を含め、大都市を中心に急速にコミニティに浸透してきています。彼らは、実によく働き、また勉強します。『タイム』誌八月三十一日号の特集は、総人口比二%のアジア系が、この秋のハーバード大学新入生の一四%、カリフォルニア大学バークレイ校の二五%に達したと報じ、この動きを百年前の東欧系ユダヤ人流入と対比しています。最近、ボストンやニューヨークでよく聞くのは、勤勉でサービスのよいアジア系の台頭で、黒人・スペイン系などの下層労働者が職を奪われ、マイノリティ内部での反目が強まっている、というものです。大都市近郊では、マイノリティ流入による治安悪化を防ぐため、土地所有や家賃のミニマムを条例で定めて貧乏人を入れないようにする白人コミニティも現れます。私の住むケンブリッジ市の近くの、コンコルドという町は、独立戦争の史跡をもち、エマーソンやホーソンを育てた田園文化の地で、リベラルな白人中産階級の多く住むところですが、アメリカ民主主義の伝統としてよくひきあいにだされる住民直接参加のタウン・ミーティングの決議で、二エーカー以下の土地分割を禁止し、貧民流入に歯止めをかけています。反核運動や原発反対に熱心な人でも、こうした自衛手段はやむをえないといっています。人種のピラミッドと階級的・階層的利害が錯綜し、競争と新陳代謝が激しいこの国では、コミニティ形成は、絶えずチェック・リチエックの必要な永続的プロセスです。アジア系新住民は、大都市のチャイナ・タウンがそうであるように、スラムに隣接した下層アパート地帯にひとまず居を定め、勤勉と高学歴によりこの新天地に定着し上昇しようとしています。

こうした社会ですから、アジア人の顔をした私でも、トシツ・ジーンズ・ナップサック

ク姿で街を歩けば、よく白人に道を尋ねられます。白人・黒人の友人にいわせると、顔をみただけでは日本人・中国人・朝鮮人の区別は困難だといえます。ちょうど、私たちがアングロサクソン系・ドイツ系・イタリア系・北欧系白人の区別がただちにはできず、南部出身黒人苦学生とアフリカ新興国エリート留学生の間の深刻な反目に、気がつかないように。しかし全身をみれば、アジア人のなかで日本人だけはなんとなく異質だ、ともいいます。ダークスーツにネクタイ・アタッシュケースのビジネスマンはもちろんのこと、メガネに肩掛けカバン・高級カメラの観光客も、他のアジア系とはどことなく違った印象を与えるようです。金払いのよさと立派な衣服・持物から、悪質業者や強盗にねらわれるのも日本人の特徴です。第一、ニューヨークに典型的なように、在米日本人は、白人ミドルクラスなみに郊外の田園邸宅地帯に「コミュニティ」を作り、他のアジア系と自らを区別し、先進国人として振舞おうとします。戦前・戦時中に苦難の生活を体験してようやく土着した日系アメリカ市民とも異なっており、いつかは必ず「豊かな」日本に帰れるという通過点意識をもっていますから、「コミュニティ」でのアメリカ人との交際もおざなりで、時々こちらの新聞がやゆするように、日本食料品店・スシバーからカラオケ・日本語テレビ・ランチ弁当にいたる日本でのくらしをそっくりそのまま移植した生活を、日本では絶対に住めない広い庭つき邸宅を拠点に、楽しんでいられるか見えます。他のアジア人たちのアメリカ社会参入・市民権獲得のための生命がけの真剣な努力に比べれば、日本人学校父兄のなかではしばしば耳にする問題、日本の良い高校・大学に子弟をいれるために受験教育を強化すべきか、当地滞在中だけでもアメリカ式の自由でのびのびした教育を与えるべきかという論争も、ぜいたくな「コンピュータ」の中の風になすぎません。白人エスタブリッシュメントからは、黄色い肌をした「マニチ」で手強い競争相手、最近の『U.S.・ニグロズ・エンド・ワールドレポーター』の表現では「無敵のビヒモス、大国日本、世界への供給者・銀行」の一員とけむたがられ、同じアジア人からは、既に別世界に離陸した「祖国の搾取・侵略者とねたまれる在米日本人は、今日の日本社会の国際的位置を象徴し、鳥からも獣からも嫌われたコウモリのようなです。そういえば、先日五木ひろし「ニューヨーク公演を、日本のシナトラとよばれる人気歌手が、着かざった中年金持婦人たちを「ジューン」機手「ターター」・ホテル貸切・豪華ミンクコート買物つきで大挙連れてきて、法外な使用料を払ってマンハッタン」のホールを借上げ、全部日本語で日本人聴衆だけを相手に、わけのわからぬエンカなるものを歌ってさつとひきあげた、と皮肉った記事がありましたっけ。

東京の地価は、私が日本を離れた昨年からは、また暴騰したようです。庶民が都心に住むのは、ますます困難になっていようです。高層オフィスビルと億ションのマンハッタン的超国籍地帯が出現しつつあるのでしょうか。しかし、東京のマンハッタン化は、スラム無しで進行しうるのでしょうか。ホモジーニアスなエリート日本人と白人ビジネスマンだけが住む「マンハッタン」の町が生まれるのでしょうか。世界都市化は、「コミュニティ」の拡散・凝集を劇的に進めます。欧米からばかりでなく、近隣アジアからも、仕事と富と自由を求めて多くの民衆が流入し、激しい競争・摩擦・対立のはてにスラム化とゴーストタウン化、階層分化と棲みわけがおこるのは、不可避と思われれます。しかも、東京の国際化・世界都市化は、すでに進行しつつある事実です。港区や品川区では、その徴候が現れているようですが、モノとカネの国際化が、ヒトだけを鎖国したまま進むとは考えられません。この春の東京自治問題研究所所報でも「TOKIOの南北問題」を報じていましたが、いま東

日本

京人Ⅱ在京日系人がかかえている問題は、単なる伝統的コミュニティの崩壊、都心昼間人口減少と郊外スプロールの問題ではなく、ロンドンやニューヨークが歴史的に経験してきた、無国籍都市化・超民族都市化の試練、その中での多人種・多文化的コミュニティの再編・創造を、はるかに急速に、はるかに深刻な国際環境のもとで、否応なくつきつけられているところにあるのではないのでしょうか？ 確かな国内情報もいままこちらに住み、やたら日本資本の世界化・巨大化を報じる英語ニュースばかりが飛込んでくる門外漢の私には、そう感じられます。とするならば、都心を追出されタウン・ミーティングの伝統を守りつつ自己の社会的経済的特権を保守しようとする郊外白人コミュニティからも、白人中心社会から差別されマイノリティ同士で互いに競争しいがみあいながらスラムからの脱出に必死で努力するアジア系新移民の生き方からも、他人ごとでないなものかを学べるような気がします。残念ながらというかやっぱりというべきか、日本政府や東京都の対応は、在ニューヨーク日本人コミュニティのそれに似て、閉鎖社会の惰性をひきずった、天上天下唯我独尊的無策が続いているようですが。

● パラダイムの喪失、^{国家} 理論の復権——アメリカ政治学会総会印象記（一九八七年九月）

フロリダからカナダまでまわった長い夏休みも終わりに近づき、研究生生活のペースを取戻すため、九月三―六日、シカゴで開かれたアメリカ政治学会＝APSA年次総会に出席してきました。以下は、その私的印象記です。断片的なもので、手元の資料も不確かですが。

アメリカ政治学会は、いうまでもなく会員一万人以上を擁する世界最大の政治学者のコミュニティです。会場のシカゴ・パーマーハウス・ホテルには、多分二千人ぐらいが集まっていたでしょうか。正確にわからないのは、一日四コマ各二時間の時間帯に同時に五〇近いパネルがもたれていて全貌はつかめず、また、会長記念講演や会務総会のような儀式にはせいぜい二百人ぐらいしか出席者がなくそれも高齢者がめだち、会場内外での旧知の仲間との食事や職探し、インフォーマルな意見交換の方が、出席者の主目的に見えたからです。かくいう私自身、西部のサンフランシスコ、東部のボストンとは異なる中部シカゴの町並の雰囲気を経験し、ノースウエスタン大に留学中の友人を訪ね、あわせてシカゴ・ジャズ・フェスティバルで無料でアートブレイキーを聞こうというわけですから、つまらぬパネルだと途中でぬけだしてシカゴ・ウエスタン・センターの方に精を出していました。今年のメイン・テーマは合衆国憲法二百周年で、憲法と立憲主義に関する分科会が多く設けられていましたが、私自身の主たる関心は、ちょうど二十年前の同じシカゴ・パーマーハウスでの総会での新政治学コーカス＝CNPS結成に始まるAPSA内部での脱行動論革命／政治学革新運動の行方を確かめることにありました。結論的にいうと、このAPSA革命二十周年は、ハンチントンの会長演説では一言も触れられませんでしたし、直接にこれを銘打ったコーカス主催のシンポジウム出席者も私を含めてたったの二人で、すでに忘れられた（あるいは思い出したくない）過去となっていることを、印象づけられました。しかしまた、その遺産をいし後遺症がいまなお続いていることを、感得できました。

ハンチントンの会長演説は、「ひとつの時代のひとつの魂——政治学と政治改革」と題し、自己の政治変動論にひきつけて政治改革を訴えるものでしたが、その軽薄そうな外貌と、会長職を意識したのかイデオロギー色を抜いた抽象論のため、聴衆にあまり反応をもたらさず、少なくとも私には全く面白くないものでした。「改革」の内容が来年の大統領選挙を意識しているらしいのはわかりませんが、急激な革命ではなく漸進的な改革というネガティブな脈絡が強調されて、フレイビンや韓国への言及もないため、迫力に欠けるのです。もっとも、ほかならぬ日米欧委員会のハンチントンの口から、改革と政治学の有意性が語られざるをえないところに、アメリカのヘゲモニー喪失と行動論革命後のアイデンティティをいまだ確立できずにいる主流派の苦悩を、かいま見ることができます。ヘゲモニーと言えば、日本では猪口邦子女史が盛んに書きまくっているようですが、多分彼女も参照したであろう『アフター・ヘゲモニー』の著者コヘイン教授が組織した「グラムシ、ヘゲモニーと国際政治経済学」と題する二つのパネルが、他のパネルの低調さに比して盛況で討論も活発でした。私は出席しませんが、新保守主義に関するパネルもいくつかあり、プログラムやペーパーで見る限りでは公然たるレーガノミクス支持の論者は皆無、サッチャーリズムとの比較や政治哲学／モラルの問題として批判的に分析したものが大半で、APSAそのものは学会としての健全さを保っているようです。

かといって、もう一つの極、結成二十周年のコーカスが元気で勢力を保っているわけでもありません。実は私は、六〇代末から七〇年代前半のコーカスの運動とイムパクトを、当地での副業的研究課題の一つにして資料もずいぶん集めてきたので、その二十周年記念シンポジウムともいうべき「コーカスの回顧」の分科会に大変期待して出かけたのですが、出席者は前述のようにクリスチャン・ベイなど報告者を含めて二人、それもほとんどが白髪の高老たちという、寂しいものでした。話は回顧談が中心で、二十年前のシカゴ総会ではあの大ホールをいっぱいにしてAPPSAがなぜベトナム戦争や公民権問題をとりあげないのかと数百人で集会を開いたものだ、元気のいい大学院生たちが次々に立って発言を求め議長は進行に苦勞していた、当初はアーモンドをはじめ主流派も若者のやることと黙認して結成宣言に助言さえしてくれたが、学会改革運動として会則変更まで問題にせずと急に冷たくなった、それでもわれわれの努力で導入した学会会長選挙では常に三分の一から半分の得票をコーカス推薦候補が得たし、七六年学会プログラムはコーカス主導で作られもっともラディカルな学会となった、黒人問題や社会主義を研究している若い研究者を就職させるためのナショナルなネットワークもできた、CNPSがAPPSA内団体として独自の企画をプログラムに入れさせたことにより、その後の婦人コーカス、黒人コーカスなどいまや数十におよぶ小グループが独自企画をもつようになった、など。しかし、なぜそれが再びわずか数十人の組織に衰退してしまったのかの議論が出ないので、思わず私も発言を求め、日本の政治学の改革を求めるものとしてその負の教訓をも聞きたいと言ったのですが、多くは沈黙し、議長のローゼンブリンク教授が、七〇年代後半からの主流派の巻きかえしと学生の保守化、そしてコーカス活動家がフェミニズム／環境問題／中南米研究／政治経済学などに分化していったのだろう、と答えました。私は、七〇年代初頭に、学会内改革にあきたらず社会主義政治の実践に走ったアラン・ウルフらのグループ、同じ時期に逆に学会内選挙運動やイデオロギー論争に疑問を持ち学問内在的批判へと離れていったローウマイらのグループなどの分裂の歴史、また七〇年代後半に入ってからコーカス自体の社会主義／マルクス主義グループへの転身＝純化による孤立と衰退を知っていましたから、それ以上の追及はやめて、日本の政治学者としてコーカスの歩みから今後も学びたいので、私からの手紙での質問やインタビューに協力してほしいむねを述べるにとどめました。そして、ローゼンブリンク教授とは今後も連絡しあうことを約しました。コーカス主催の他の分科会も低調で、わずかにニクララガ問題を扱った時局討論に三〇人ほど集まったのが最高のものでした。かつてAPPSAを根底から揺るがしたコーカスも、今はAPPSA内に数十存在する特定イシュー／方法研究グループの一つ、それも後継者を欠いたまま細々と雑誌『ニュー・ポリテクニカル・サイエンス』を刊行するだけの老いた少数派集団との印象を否めません。

しかし、ベイらの回想の一部、自分たちコーカスの活動がいま興隆しつつある政治学会の新しい潮流を育てたのだという自負は、半ばあたっていきます。それは、黒人コーカス／婦人コーカスや最近登場したグリーン・コーカス（環境グループ）がCNPSとメンバーが重複し友好グループであるという事実にとどまりません。今年の大会でいくつもの分科会／ラウンドテーブル／シンポジウムに登場した売れっ子たち、クラスナー／カッツ（エンシユ）／スチンボルなどが「コーカスの時代」をくぐった世代で、マルクス主義的手法をも取入れ、新制度主義／国家中心主義／コーポラティズム／政治経済学などの新しい

「国際的な「国家論」ハネサンス」
の「環境と成り」

領域／方法を開拓してきた人々であることに気づきます。この人々は、コーカスの時代にアイビーリーグの大学院生やテニアなし教員であり、脱行動論の理論的模索を七〇年代に進めて、今日エリート大学にテニアつき教授として安定した地位を築き主流派に入りつつあるところが、共通しています。ひるがえってコーカスの活動家のその後をたどると、多くが地方の大学／カレッジに教職を得ましたが、地域政治や文献解釈の世界に沈黙し当初の問題設定／方法意識から離れていった例もみかけます。もちろん、キヤッツネルセン／ケセルマン／ウルフ／パイヴン／パレンテらは、すぐれた仕事を続けているのですが、APPSA企画委員会のプログラムでもこれら新世代の旗手たちの活躍が目立ちますが、それ以上に印象的だったのは、彼らを中心とする政治経済学会議グループの企画の充実／討論の活発さです。独自に約三〇（CNPSは二二）のパネルを組織した人材の豊富さもさることながら、国際政治から政治思想に到る広範な領域で、新制度主義／国家中心主義／ヘゲモニー論などの新しい手法での問題提起を展開し、若い世代をひきつけていました。もっとも、彼らの多くは予定されていたペーパーは提出せず口頭報告ですませ、また、私がおう予定だったシムミターやビーター・ホルのように、総会そのものに出席しないというAPPSAへの消極的姿勢も目につきました。センブリック教授によれば、この政治経済学グループも、もともとコーカスの影響下に形成されたものなそうです。

私の出席した限りで印象的だったのは、これら政治経済学グループの活躍と、いまひとつ、婦人コーカスを中心とした女性政治学者の活躍です。スコチボル、パイヴンなどの中堅ばかりでなく、院生クラスでも優秀な女性の報告／ペーパーが多く、これもコーカスの時代の遺産であることは、アメリカ社会全体においてベトナム戦争時代の社会変動のうち最も定着したのが婦人の地位であることから当然といえます。この点では日本の政治学との距離は、歴然たるものです。

印象の最後に、日本／アジア政治研究にも触れておきましょう。全体で数百の報告／ペーパーのうち、日本を主題的に扱ったものは、私が見たかぎり五指に足りません。国際政治や政治経済学で附随的には言及されますが、現実の政治経済の歩みに比すれば、学的には日本は未だ？つきのマージナルな国なようです。それでも日本政治研究グループのパネルが一つあったので私ものぞいてみましたが、最終日の最後の時間帯というハンデもあったか、出席は私と私の友人を含む八人のみ、議長のカンベルが族議員と行政改革についての報告にほとんどコメントし、私が若い報告者に発した族政治と派閥政治の関連についての質問にもカンベルが答えるという雰囲気でした。私個人としては、そこで知合ったフアンズウオース教授から日本政治研究者の名簿をもらい、マクネリー教授からは私と田口教授で世界政治学学会パリ大会に提出した論文を自分のペーパーで引用したからと論文を贈呈されてびっくりし、また、フルブライトの選考で私を強く推してくれたモシヤー氏がオクラホマのトルササ大学に職を得ていて再会できたのが、収穫でしたが。名簿で見ると、日本政治研究者は約百人いますが、歴史学や地域研究を主舞台にしている人が多いらしく、APPSAの中心で通用する政治学者で日本をも対象としているのは政策研究のペンベルや予算の主カンベルなどごく少数と見受けられます。予定報告者の欠席や聴衆不足での中止など全般的に低調なパネルが多いなかで、私自身が最も感動したのは、コーリア研究グループのパネルで、民主化運動の根拠と行方について真剣に論じあう在米韓国人研究者とアメリカ人韓国研究者の姿に強く刺激されたことを、付記しておきます。

Beziehungen zwischen Staat und Individuum direkt verstärkt werden. Der Schlüssel dafür wird in der Neureformierung des Erziehungswesens gesehen. Die Diagnose lautet, daß nachlassender Arbeitswillen, Auflösung der Familie und jugendliches Rowdytum auf die — als Folge einer Erziehung zum Frieden und zur Gleichberechtigung — gesunkene Autorität der Eltern und auf die mangelnde Unterordnung gegenüber dem Staat zurückzuführen seien. Dem soll mit einer von Kindheit an erfolgenden Erziehung zur Staatstreue, die der vor dem Kriege herrschenden Treue gegenüber dem Tenno gleichwertig sein sollte, abgeholfen werden. Nationalistische Gedanken in der Bevölkerung, wie etwa dem, daß »wir Japaner auch im Ausland nicht unseren Stolz als Japaner verlieren«, sollen die Arbeitsbereitschaft sichern helfen. Die Diagnose freilich ist falsch: Es sind in Wirklichkeit gerade die Zustände der »Unternehmensgesellschaft« im Nachkriegsjapan — die unterschiedliche Behandlung der Beschäftigten aufgrund ihrer formalen Bildungsabschlüsse und die inner- wie außerhalb der Betriebe herrschende Konkurrenz — die schon in der Schulausbildung zu Streß, zu Rowdytum und zu Selbsttötungen bei jungen Menschen führen.

Es ist daher nicht sicher, ob sich die japanische Politik rasch in Richtung auf den von Ministerpräsident Nakasone anvisierten Neoretatismus fortbewegt. Es ist kaum anzunehmen, daß die Ideologie einer Verwandlung Japans in eine militärische Großmacht und einer Verstärkung des Patriotismus, die auch innerhalb der auf gemeinsamer neokonservativer Grundlage agierenden herrschenden Klasse nur von der äußersten Rechten vertreten wird, so ohne weiteres von der Bevölkerung akzeptiert wird, zumal damit große soziale Veränderungen verbunden sein werden. Die reale Politik dürfte eher darin bestehen, einerseits den Etatismus, wie er in dem Schlagwort »Sieger, aber auch Verlierer ist immer der Staat« zum Ausdruck kommt, verstärkt zur Geltung zu bringen und gleichzeitig ein dem Krisenmanagement angemessenes Netzwerk korporativer Beziehungen zwischen Staat und Individuen zu schaffen. Solch ein festes Netzwerk existiert, insbesondere auf der Meso-Ebene bereits zwischen Staatsbürokratie und Kapitalverbänden. Auf der Makro-Ebene wird nun die Bemühung ansetzen, auch die nationalen Dachverbände der Gewerkschaften einzubeziehen und dies Netzwerk dann auf die lokale und gesellschaftliche Ebene auszudehnen. In der Tat bildet sich in der Gewerkschaftsbewegung zur Zeit ein neuer sozialpartnerschaftlich orientierter nationaler Dachverband — was ohne Zweifel die Korporatisierung unter Einbeziehung von Repräsentanten der Seite der Arbeit auf der Makro- wie auf der Meso-Ebene erheblich vereinfachen wird. In dem sogenannten »Außerordentlichen Rat für Erziehung«, ein dem »Außerordentlichen Rat für öffentliche Verwaltung« ähnliches korporatives Organ, wird das nach 1945 entstandene japanische Bildungswesen einer totalen Revision unterzogen. Da der Korporatismus jedoch von vornherein auch gewisse Zugeständnisse an die Vertreter der Arbeiter und Lehrer vorsieht, werden sich die neoetatistischen Absichten nicht ohne Abstriche in legitimierte politische Entscheidungen umsetzen lassen. Darüber hinaus gibt es auch innerhalb der Herrschenden unterschiedliche Fraktionen, die sich über wichtige Fragen nicht einig sind. So über die Frage, ob Japan unter Abänderung der Verfassung zu einer militärischen Großmacht ausgebaut werden oder ob die Verfassung unangetastet bleiben soll; ob die Selbstverteidigungstreitkräfte beibehalten und der Kurs der Internationalisierung primär auf ökonomischer Basis fortgesetzt werden

soll; ob zur Beseitigung des Finanzdefizits gespart werden oder ob eine aktive Ausgabenpolitik die Konjunktur anreizen soll; ob die Politik der Exportsteigerung mit der spitzentechnologischen Industrie im Zentrum fortgesetzt oder ob die Inlandsnachfrage durch Städteerneuerung und Wohnungsbau gesteigert werden soll und dadurch die Handelsfraktionen beseitigt werden können.

Außerdem besteht die Hoffnung, daß die große Zahl der Auslandsreisen dazu führt, fremde Kulturen besser kennenzulernen und einen vorurteilsfreien Internationalismus entstehen läßt. Japan wird auch nach dem Herbst 1987, wer auch immer zum neuen Ministerpräsidenten gewählt werden mag, die schrittweise Suche nach seinem Platz in der internationalen Gemeinschaft fortsetzen müssen.

Aus dem Japanischen von Horst Arnold-Kanamori

Literatur

- Borden, William S. (1984), *The Pacific Alliance: United States Foreign Economic Policy and Japanese Trade Recovery, 1947-1955*. The University of Wisconsin Press
- Cawson, Alan (1985), Varieties of Corporatism: the Importance of the Meso-Level of Interest Intermediation, in: A. Cawson (ed.), *Organized Interests and the State: Studies in Meso-Corporatism*, SAGE Publications
- Dohse, Knuth/Jürgens, Ulrich/Malsch, Thomas (1985), From »Fordism« to »Toyotism«?: The Social Organization of the Labor Process in the Japanese Automobile Industry, in: *Politics and Society*, Vol. 14, No. 2
- Johnson, Chalmers (1982), *MITI and the Japanese Miracle: The Growth of Industrial Policy, 1925-1975*, Stanford University Press
- Kato, Tetsuro (1984), A Preliminary Note on the State in Contemporary Japan, in: *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, Vol. 16, No. 1
- Pempel, T. J./Tsunekawa, Keiichi (1979), Corporatism without Labor?: The Japanese Anomaly, in: Schmitter, P. C./Lehmbruch, G. (ed.), *Trends toward Corporatist Intermediation*, SAGE Publications
- Urry, John (1981), *The Anatomy of Capitalist Societies: The Economy, Civil Society and the State*, Macmillan